

第13回「泉大津市オリウム随筆賞」

【オリウム随筆賞（佳作）】

織り姫様の唄

須山 恵美・神奈川県横須賀市

山奥のある場所を目指し、引率の先生と私達生徒五人は坂道を歩いてきた。まだ五月だというのに照り付ける太陽は眩しく、新緑の木々が輝いて見えた。目的地はもうすぐそこだ。私は逸る気持ちを抑えきれず、自然と早足になる。

一体、何をしに行くのか。話は一か月前に遡る。私の通う中学校では、三年生の五月に修学旅行がある。今日のHRで行先などが発表されるということで、クラス全体が浮き足立っていた。例年、京都・奈良だったため、クラスメイト達の気分は古都に染まっていた。そして、HRの時間。先生がほとんど小さく咳をするところ言い放った。

「今年長野でファームステイだ！」

聞き慣れない単語に、全員が困惑の表情を浮かべてざわつく。先生は静かになるのを待つと概要を説明し始めた。ファームステイとは農家さんの家に宿泊し、農作業の手伝いをしたり、やり方を教わったりする。すなわち、「農業体験」のことを指す。また、他にも自然と触れ合うアクティビティやツアーも用意されているそう。配られた紙には都会では味わえない数々の体験が載っていた。思いもよらない内容だったが、その珍しさにクラスの雰囲気は一変して自然に染まっていた。

そんな中、私が特に興味を持ったのが機織り体験だった。元々、手芸が趣味で裁縫に編み物にビーズ：と何でもやっている。さらに小さい頃、母に読んでもらった七夕の話に心を打たれ、いつか織り姫様のように機織りをしてみたいと夢を抱いていたのだ。こうして私を含めた五人の生徒は機織り体験を選択し、工房へと向かっているのだった。

たどり着いた工房は古民家と呼ぶのにふさわしく、田舎の祖母の家に来たような安心感があった。教えてくれるのは笑い皺が素敵なおじいさんとおばあさんご夫婦で、機織り歴は私の年齢の三倍以上だ。

「今回はコースターを織ります。今からやって見せるからよく見てね」

案内された部屋には重厚な機織り機が六台も並んでいた。私は圧倒されながらも、おじいさんの織る様子をしっかりと目に焼き付けていく。足元にあるペダルみたいなものを上下に動かして、縦糸の隙間に横糸を通す。また足を動かしたかと思うと、今度は手を使い、木の板みたいなものを布に押し当てる。これの繰り返しで布が出来上がっていく。私達の目が慣れてくるとおじいさんは「いつもの速さでやってみよう」と速さを上げる。シュツ、タン。シュツ、タン。と響くりズムは心地よく、まるでピアノを奏でているようだった。気が付け

ばあつという間に完成していた。

いよいよ、私達の織る番である。習った動きを思い出しながら足と手を動かしてみるが、ちぐはぐで上手くいかない。まるで、ぎこちないロボットだ。ようやくトンと横糸が一本通り、私は歓喜した。といつても布端の糸がだぶついているし、折り目もつぶれている感じがする。手足は明日の朝には筋肉痛になりそうな予感がした。見ていると優雅な機織りだが、実は体育会系の一面もあるのだと初めて知った。しかし、ここで音を上げる私ではない。せっかく体験に来たのだから、上手くなりたいたがむしやらに織ってゆく。すると、おじいさんが私のところにやってきて、「他の唄に耳を傾けてごらん」と勧める。唄とは機織りの音を言っているようだ。私は一旦、手を止めて耳を澄ましてみる。すると、優しい親友はスツ、トン。スツ、トン。と穏やかな音がした。知的な親友はサツ、カン。サツ、カン。と端正で凛々しい音がした。恰幅が良くてギャグ好きな先生の音はガシヤ、ポン。ガシヤ、ポン。ユ一モア抜群で思わず笑みがこぼれる。同じ機織り機でも織る人の性格でこんなにも音が違うのか、と驚きと感動を覚えた。となると気になるのは自分の音である。今度は憧れの織り姫様の唄声をイメージしながら、織ってみることにした。すると不思議なことに、布端も折り目も整い、すらすらと織り上がってゆく。前半の織りと比べるとその差は一目瞭然だった。〃機織りってこんなに楽しいんだ!〃

おじいさんの一言をきっかけに、私は機織りの魅力と神髄にほんの少しだけ触れられた。そうして織り続けているとまたおじいさんが私のところにやってきてぼそりと呟く。

「美しい唄だ」

それは最高の誉め言葉だった。私は嬉しくて耳たぶまで熱をおびているのが分かった。

約十二センチのコースターができあがった時にはもう夕暮れだった。手に乗せると小さくて軽い。でも、自分で織ったという愛おしさと重みがずっしりと感じられた。ご夫婦にお礼と別れを告げ、私達は宿へと向かう。帰り道、まだあの音が耳にこだましていた。シャツ、サン。シャツ、サン。それは私の、織り姫様の唄だった。